
魔法少女リリカルなのはA'sOO～IF～（仮）

読者K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA・s O O ～ I F ～ (仮)

【Nコード】

N3653BA

【作者名】

読者K

【あらすじ】

魔法少女の世界へ飛ばされた、ガンダムマイスター刹那・F・セイエイと魔法少女フェイト・テストロッサのとある一日。魔法少女リリカルなのはA・sと機動戦士ガンダムOOのクロスオーバー作品・・・などという大それたものではなく、物書き未経験の素人による処女作で駄文です。読みづらい、誤字脱字等の至らないところが多々あると思います。

作者の原作知識は、それほど高くありません。

また、オリジナル設定が含まれておりますので、原作を大切にされ

ている方はご注意ください。若しくは、ブラウザのバックボタンを
お願いします。

諸事情により連載扱いにしていますが、実際は1話完結の短編物
です。現在、3話目を執筆中・・・掲載日は未定です。

刹那・F・セイエイ

12月初旬。朝日の昇りきらない薄暗い空。
時刻は午前6時。

「・・・朝か」

癖のある黒髪に褐色の肌、歳のころ16、7の少年が目を覚ました。冬場の朝となれば寒く、普通は温かい布団から起きるのは億劫に思うものだが、少年はそんな感じも微塵も出さずにベッドから出て、昨夜就寝につく前に椅子に掛けておいた上下紺のジャージを手早く着る。

単に目覚めがいいのか、それとも別の要因があるのか定かではないが、少年は日課・・・というよりは趣味である筋力トレーニングを始める。

少年の名は、刹那・F・セイエイ。

中東出身であるが、ワケあって今はここ・・・日本の海鳴市内のマンションの一室を借りて住んでいる。

海鳴市内でも高級物件に入るであろうこのマンションに、たかだか16、7の少年が借りられるとは思えないのだがこれにも訳がある。春先に起きた事件をきっかけに出会った者達の協力により一室を借りることが出来たのだ。

筋力トレーニングを終え、着替えを持って浴室へ向かう。

汗を流しにシャワーを浴びるためである。

一通り汗を流し、浴室を出て玄関へ新聞を取りに行く。

毎朝、新聞に目を通すことも日課の一つである。

国内情勢は勿論だが、海外に関する記事は入念に読む。

リビングのソファアに座り新聞を読んでいると背後から声をかけられた。

「刹那、おはよう」

声のする方へ振り向くと、金の髪に赤い瞳の少女と少女の足元に一匹の子犬。

オレンジの毛並みと額に赤い宝石・・・と少々変わった子犬である。
「ああ。起きたかフェイト、アルフ」

少女の名は、フェイト・テストロッサ。

子犬の名は、アルフ。

春先の 事件 で出会った者達で同居人達である。

本来なら彼女たちとは同居するはずではなかったのだが、部屋の広さと刹那に部屋を割り当てた人物によって同居することになってしまったのだ。

「ふわあ~~~~よく寝た。おはよう、刹那」

フェイトに続き、欠伸をしながらアルフも挨拶をする。

子犬が喋るなど前代未聞だが、刹那もフェイトも特段気にしていない。

というよりも、二人にとってアルフが喋ることは可笑しなことではない。

アルフはフェイトの 使い魔 と呼ばれるものである。

昔、フェイトが瀕死のアルフを拾い、契約を行ったことでアルフは一命を取り留めた。

以後、彼女の使い魔として支えている。

そう、フェイトは 魔法 が使える。無論、アルフも。

刹那も使えるが、彼女達とは若干異なる。

魔法などお伽噺話の類、この地球にあるはずもない。

そう思うのが普通であるが、フェイトもアルフも地球とは異なる世界の生まれであり、生まれた時から魔法が身近にあった。

では、地球出身である刹那が何故魔法を使えるのか？

刹那は地球出身だが ここ とは違う地球・・・所謂、並行世界の

地球出身であることが要因の一つだろう。

春先の 事件 の際に、何らかの事故によりこちら側へ来てしまったのだ。

何とも奇妙な話だが、ここに住んでいるのは異世界出身者同士である。

「さて、んじゃ食事の準備でもするかね」

子犬から女性の姿へ変えながらアルフが言う。

かつて、フェイトの家庭教師から一通り教わったため、食事や洗濯等の家事はアルフが中心に行っている。

「手伝おう。フェイト、顔を洗って支度を整えてこい」

新聞を折りたたんで、リビングのテーブルに置く。

刹那自身、料理は出来ないが何もせず座って待っているのも気が引けるのか手伝うと申し出た。

食器出しなどの簡単な作業なら出来るし、その方が早く済むと思ったのだろう。

「うん。わかった」

踵を返し、パタパタと洗面所へ向かうフェイトを確認してから、アルフと共にキッチンへ向かう。

ここで暮らし始めてまだ一週間。だが、各々慣れた感じである。

「刹那、なんか食べたい物ある？」

「特にはない」

尋ねるアルフに、そっけなく答える刹那。

別に二人の仲が悪いわけではなく、刹那という人間がこうなのだ。

「アンタ、いつもそれだね。好きな食べ物ってないの？」

「食べれば文句は言わない」

強いて言えば、即座にカロリー摂取が出来るカロ・・・」

「はいはい。今日はちよつと遅いし、トーストにベーコンエッグ、サラダでいっか。」

土曜日でフェイトの学校も半日だから、お弁当を用意する必要もないし」

「お前はそれで足りるのか？」

以前、ここで暮らす前にも彼女達と食事をともにしたことがあったが、少食のフェイトに比べ、アルフはかなり食べる。

それゆえに、刹那はアルフに確認したのだ。

「子犬フォームは燃費がいいからね。大丈夫だよ」

「そうか」

「そんじゃ、始めますか。刹那はトーストを頼むよ」

「わかった」

いつもどおり、刹那の正面にフェイトが座り。

フェイトの隣にアルフが座る。

「いただきます」

テーブルに並べられた朝食を前に食事前の挨拶をする。

適当に千切ったレタスにキャベツ。きれいに切り揃えられたキュウ

リとトマト。千切りの人参。

簡単なサラダ盛り付け。

各々にトーストとベーコンエッグ、牛乳。

刹那とアルフはトースト2枚。フェイトは1枚。

元々口数の少ない刹那とフェイト、和気藹藹とは言えないが、他愛のない話を交えつつ朝食の時間は過ぎていく。

「フェイト、そろそろ時間ではないか？」

「うん」

朝食を済ませ少しのんびりしていると、刹那が白い制服を身に纏ったフェイトに声をかけた。

「準備はできているのか？」

「大丈夫。昨日のうちに済ませてあるから」

「そうか」

鞆とコートを取りに自室へ向かうフェイト。

フェイトはこれから学校へ登校する。

私立聖祥大附属小学校。

その三年生。つい先日、転校生として入学したばかり。

白い制服の上に薄い茶色のコートを羽織って鞆を持ったフェイトが自室から出てきて玄関へ向かう。

「刹那、アルフ。行ってきます」

「いつてらっしゃい。フェイト」

「気をつけてな」

笑顔のフェイトに、やはり笑顔で答えるアルフ。

かたや刹那は無表情で見送る。

フェイトを見送った後、リビングで読みかけの新聞を読み始める。

こちら側は、あちら側の地球と違い大規模な紛争はないようで少し安堵する。

もつとも、あつたとしても一人ではどうすることも出来ないしするつもりもない。

紛争・・・刹那は元の世界であらゆる紛争に対して 武力介入を行っていた。

ソレスタルビーイング 紛争根絶を掲げる私設武装組織。

全高約18mの人型機動兵器、通称MS。

従来のMSとは比較にならない高性能のMSガンダムを所有し、その操縦者を パイロット ガンダムマイスター と呼ぶ。

刹那はガンダムマイスターの一人であり、ガンダムエクシアと共に最前線で戦い続けた。

武力介入を繰り返した結果、世界は国連軍を組織し、ソレスタルビーイングは国連軍の苛烈な攻撃により壊滅状態へ追い込まれた。

紛争根絶を掲げ世界を一つへ。

皮肉にも『ソレスタルビーイングを倒す』という意志で世界は一つ

になった。

最後の戦い。

漆黒のMSと相討ちになった際、相手の機体の爆発により目の前が真っ白になった。

そこまでは覚えている。

気がつけば地球にいた。

・・・おかしい。自分は宇宙にいた筈なのに。

ガンダムといえど損傷した状態で、しかも自分は気を失って機体制御をしていない。

そんな状態で大気圏を突破できるとは思えない。

何より、自分の周囲にガンダムがなかったのだ。

ガンダムから放りだされたのか・・・ありえない。

それならば、自分は生きてはいない。

それに、周囲に被害もない。

ガンダムが地球へ落下したのであれば、地表とガンダムの衝突で大なり小なり被害が出るはず。

その被害すらない。

自分が違う地球へ来たと気付くまで、それほど時間はかからなかった。

物思い耽っていたようだ。時間が迫っている。

刹那はこれからアルバイトへ向かう。

フェイトと違い学校へ通っていないため、日中はすることがない。

それに、いくら『家賃を含め全てこちらで負担する』と言われても、何でもかんでも甘えるわけにはいかない。

せめて食費や自分が揃えたい物については最低限自分で稼ぐ。

そんな思いで慣れないアルバイトは始めた。

「アルフ、俺もそろそろ出る。後のことは任せた。施錠だけはしっかり頼む」

「はいよ、いつてらっしやい」

グレーの長ズボン。白いシャツの上に深い青色の長袖。そして、赤いマフラーを首に捲いて出ていく。

行先はマンションからさほど遠くない市内の商店街。

その真ん中にある喫茶店 みどりや 翠屋

ここのウェイターとして雇ってもらっている。

翠屋はフェイトの友人、高町なのはの両親が経営している。

正直、刹那の人間性を考えると接客業に向いているとはお世辞にも言えない。

だが、愛娘の友達であるフェイトとその保護責任者の頼みを無碍に出来なかった。

何より、愛娘がフェイトと一緒に刹那と楽しそうに（刹那は無表情だが）話をしている姿を見て、少なくとも信頼できる人間だと、なのはの父士郎は思った。

「おはよう、刹那君。今日もよろしくね」

「ああ」

なのはの母桃子が笑顔で声をかけるが、刹那は相変わらず無表情で淡々としている。

士郎は苦笑しつつも開店の準備を進める。

喫茶 翠屋

ケーキを中心としたスイーツと自家焙煎のコーヒー。

商店街では有名な喫茶店で、駅前の商店街という立地条件もあって、学校帰りの若い女性客が多い。

今日は土曜日で午前で授業が終わった女子生徒を中心に賑わっていた。

上着を脱ぎ、白いシャツの上から黒いエプロンを身につけ、ウェイターとして注文されたケーキや紅茶をテーブルへ運ぶ刹那。

「注文の品だ」

客に対してまで無愛想であるため、自分たちへはともかく、せめて客には少しは愛想よくして欲しいと思う土郎。いつかクレームが出るのではないかと、内心ヒヤヒヤしていた。だが、女性客は気にするどころか、それが逆に『イイ』と言っている様だ。

まだ幼さが残るが、刹那は整端な顔立ちをしている。

刹那の外見から、愛想よくされるよりも多少冷たくされる方が、女性受けはいいようだ。

現に、刹那が働き始めてから高校生を中心に若い女性客の来店が増えたのも確かだ。

正午を過ぎ、流石に昼食にケーキとコーヒーという客もおらず、来客数も一旦落ち着いてきた頃、入口の方から元気な声が聞こえてきた。

「お父さん、お母さん。ただいま！」

栗色の髪を頭の左右で結った少女。

士郎と桃子の愛娘。高町家の末っ子、高町なのはだ。

「こ、こんにちは。お邪魔します」

なのはに続いて申し訳なさそうに入ってきたのはフェイト。

「お邪魔します」

その次に入ってきたのは青い髪の少女、月村すずか。

フェイトと同じく金の髪の少女、アリサ・バニングス。

「おかえり、なのは。フェイトちゃん達もいらっしやい」

桃子が笑顔で出迎える。

「えへへ。あ、こんにちは。刹那君」

「こんにちは、刹那さん」

「お仕事、お疲れさまです」

「お疲れさま・・・刹那」

なのは達が刹那に声をかける。

「ああ」

相変わらず淡々とした刹那に、苦笑いのすずかとアリサ。刹那の態度に慣れているのか、なのははにやははと笑い。なのはと同じく慣れているフェイトは、微笑んでいた、

なのはと出会ったのは、フェイトと出会ったのと同時期。

やはり春先の 事件 絡みである。

ジュエルシード事件

ジュエルシード と呼ばれる物を巡って、なのはとフェイトは幾度となく戦った。

刹那は直接戦ってはいないが、フェイトと同等の力を持ち、意志の強い少女であることは確かだった。

なのはも 魔法 を使用できる 魔導師 だ。

この場でなのはが 魔導師 である事を知っているのは刹那とフェイトだけだ。

なのはは家族やすずか、アリサにこの事実を打ち明けてはいない。いずれ、なのは自身が話すだろう。

だから、刹那からは何も言わない。

「なのは、奥にお昼の用意をしてあるから。食べていきなさい。フェイトちゃん達もどうぞ」

「うん、わかった」

「え、いいんですか？」

「もちろん！」

「それなら、お言葉に甘えます。あつ、アルフに連絡しなきゃ」

桃子がなのは達に昼食を促していると、士郎が刹那に声をかけた。

「刹那君も一緒に食べてきなさい」

「いいのか？まだ、休憩時間ではないが・・・」

「大丈夫だよ。お客の数も落ち着いているし、もうすぐ美由希も来るしね」

美由希はなのはの姉で、学校が終わると店の手伝いをしている。

また、兄恭也から剣術を教わっているそうだ。

「・・・わかった」

少し思案したあとエプロンを外し、なのは達の後をついて行く。

「刹那君と一緒にのお食事は、久しぶりだね」

ニコニコしながら、刹那の方を振り返って話しかける。

「私たちは初めてね。ね、すずか」

「うん」

アリサとすずかは多少緊張しているようである。

奥の間で昼食をとる少女4人と無表情の少年。

なのはとアリサが良く喋り、フェイトとすずかも時折会話に交じりながら、楽しく食卓を囲む。

年頃の男子ならば羨ましがらる状況だろう。

しかも、少女4人は美少女とも言える。

だがそんな状況でも刹那は気にもせず、ごく稀に相槌をつく程度。

活発なアリサにとって、刹那の反応はいささか不満ではあるが、折角の楽しい時間を台無しにするつもりはなく口には出さない。

それに、これが刹那という人間なのだと思う事にした。

昼食を終え、なのは達は家で遊ぶからと実家へ向かい、刹那は引き続き仕事に専念した。

夕方、午後6時30分。

日も完全に沈み、客足もまばらになって、手持無沙汰の時間が多くなってくる時間帯。

店内の様子を見て土郎が僅かに頷くと、

「刹那君。今日は、もうあがっていいよ」

「そうか。なら、先にあがらせてもらおう」

エプロンを外し土郎に渡すと「お疲れ様」と労いの声をかける。

桃子も刹那に勞いの声をかける。

「お疲れ様、刹那君。明日もよろしくね」

「ああ。失礼する」

二人を正面に見据えて、しっかりとした口調で返答し、翠屋をあとにする。

刹那の姿が見えなくなると、

「しかし、彼のコミュニケーションはもう少し何とかならいかな
ふうと士郎がため息をつきつつ、ポロリとこぼす

「そうね。でも、素直でいい子よ」

と、桃子が笑顔で答える。

寒空のなか、帰路につく刹那。

歩みを止め、ふと空を見上げると数多の星が輝きを放っている。

宇宙に出れば星などいくらでも見ることができる。

さらに、余計な光がないため、地上から見るよりもその輝きは強く美しい。

「……………」

何か思うところがあるのか、暫く星を見つめていた。

「……………帰るか」

歩みを再開し、先ほどよりも速度を上げて帰路につく。

「戻った」

マンションの玄関ドアを開け、靴を脱ぎリビングへ向かう。

「おかえり、刹那」

「おかえり〜」

フェイトとアルフが出迎える。

マフラーを外し、適当にソファへ置く。

「行くぞ」

「うん」

「はいよ」
帰ってきたばかりで、一体何処へ行くというのか。
だが、フェイトもアルフも分かっているため、刹那のあとをついて行く。

刹那達が借りている部屋の1階上の部屋。

そのベルを鳴らすと

『はいはい』

と、活発そうな女の子の声がインターフォンから聞こえてきた。

「こんばんわ。エイミィ」

ガチャッとドアが開くとエイミィと呼ばれた女の子が出てきた。

「三人ともいらしゃい。待ってたよ」

「やつ！」

「失礼する」

「どうぞ、どうぞ」

エイミィは三人を招き入れた。

リビングへ向かうと碧の髪の女性と刹那と同じ黒髪の少年がソファ
ーに座って待っていた。

「こんばんわ。フェイトさん」

「こんばんわ。リンディて・・・リンディさん」

リンディと呼ばれた女性は、言い直したフェイトにクスリと笑った。
リンディ・ハラオウン。

フェイトの保護責任者であり、刹那達に部屋を割り当てた本人。

「いらつしゃい。フェイト、アルフ、刹那」

「お、クロノ」

「ああ」

クロノと呼ばれた少年が、ソファから立ち上がって刹那達に声を
かける。

彼はリンディの息子である。

「今日は、お鍋だよ！」

エイミーがキッチンテーブルに少し大きな土鍋を置きながら、皆に声をかける。

そう、刹那達は毎日、夕食の時はこうして集まって食事をするのだ。

リンディ・ハラオウン。

クロノ・ハラオウン。

エイミー・リミエッタ。

この三人も ジュエルシード事件 で知り合った者達だ。

時空管理局

次元世界を管理する司法機関。それが、三人が所属する組織の名前である。

魔法 が未発達の地球は管理外であるが、管理外世界であっても魔法 や ロストロギア 古代遺失物 が使用された場合は別である。

そして、 ジュエルシード が ロストロギア 古代遺失物 に該当する。

ジュエルシード はユーノ・スクライアという少年によって発掘され、移送中の事故でこの地球に散らばってしまった。

なのははユーノと 魔法 に出会い、散らばってしまった ジュエルシード の回収の手伝いを。

フェイトは母親の為に。

なのはとフェイト、それぞれの思いを胸に何度も戦った。

ジュエルシード事件 は、フェイトにとって悲しい結末を迎えた。母プレシア・テストロツサに見放され、再び会う事は叶わない。

それでも、悲しいことばかりではない。なのはやまずか、アリサと友達になり。

リンディから養子の話もある。

フェイト自身の心の整理はまだつかないだろうが、暗い未来ではない。

フェイトとアルフは事件後に管理局の囑託魔導師となった。

刹那は管理局には入らず、民間協力者として力を貸している。刹那がバイトをしているのもこの辺りが要因の一ついえる。『管理局が全て負担する』と言っても、自分は管理局に属していないからだ。貸しをあまり作りたくないのだろう。

では、事件が終わったにも関わらず、何故管理局員が地球に住んでいるのか。

それは、ここ最近地球を中心に魔導師が襲われる事件が多発しているためだ。

そして、つい先日なのはが襲われた。

赤い服の勝気な少女。

ピンクの髪の凛とした女剣士。

アルフ同様の獣の耳と尻尾を持った男。

現場に着いた時点でなのはだいぶ消耗していた。間一髪といったところ。

だが、なのはが砲撃を撃つ瞬間、リンカーコアから魔力を蒐集されてしまった。

詳しくは分からないが、闇の書 というロストログアが絡んでいるそうさ。

闇の書 の魔力蒐集は一人につき一度きり。

再びなのはが襲われる可能性は低いが、事件調査と対応、そしてなのはの護衛ということで現在のこのマンションを拠点としている。

マンションの広さを考えると、多少窮屈かもしれないが6人でも生活できないこともないが、もう一室借りることが決まった。

割り当てとして、男女別になるのが妥当なのだろうが、刹那とクロノの二人だと家事に問題がありそうだということ。

リンディとクロノは親子だから一緒の方がいいだろうと。

そんな、あれこれと理由をつけられてフェイトとアルフの三人で同

居するに至った。

夕食を終え、 闇の書 への対応。今後の捜査方針を話合う。
午後9時を回ったところで今日はお開きとなった。

「・・・」

「ただいま」

部屋へ戻った時、フェイトが口にした。

部屋の住人はこの場に一緒にいる。

フェイトは居ようと居まいと必ず言う。

刹那は無言。

そもそも外出から帰っても「ただいま」とは言わない。

その事に少し寂しく思うフェイトだが、刹那は気付かない。

あるいは、気付かないふりをしていいのか。

確かなこと、それは、刹那の今帰る場所は確かに「ここ」だが「ここ」ではない。

自分は、本来この世界に存在しない。

もっと言えば、この世界に関わる事象に存在してはならないのだらう。

いずれは元の世界へ戻り、自分達が変えた世界がどうなったのか、

この目で確認しなければならぬ。

だから・・・この世界を去る時に躊躇しないために冷静に冷徹になる。

夜は更けていく・・・。

これは、限りなく無いに等しい可能性・・・IFの一つ。

刹那・F・セイエイの一日。

「待っている。お前の不安、俺が取り除いてやる」

「パパ？」

「刹那君！？」

「刹那！」

「ダブルオーライザー、刹那・F・セイエイ。ゆりかごを破壊する！！」

これも可能性の一つ。未来の姿。

刹那・F・セイエイ（後書き）

駄文を読んでいただき、誠にありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

感想、誤字脱字の指摘、不満等なんでも構いません。
何かありましたら、よろしく願います。

また、これを読んで盗作の疑いを持たれましたらご一報ください。
無いとは思いますが、可能性は0ではないですから、あった場合は
即刻削除します。

フェイト・テストロッサ（前書き）

前話？ 『刹那・F・セイエイ』のフェイト視点です。

色々、被っていますがそうでない部分もあります。

つまらい駄文ですが、どうぞよろしくお願いします。

フェイト・テストロッサ

12月初旬。日本、海鳴市内のマンション。

美しい金髪の少女が寝ている部屋に、カーテンの隙間から徐々に日の光が射しこむ。

ピピピピッと目覚まし時計が起床時刻を知らせる音が室内に響く。

「・・・うっ」

ベッドから身を起こし、目を擦る。

少女の名は、フェイト・テストロッサ。9歳。

市内にある私立聖祥大附属小学校に通う小学三年生。

・・・のだが、フェイトは 魔法 を使うことの出来る 魔導師 である。

地球とは異なる世界の出身であり、物心が付いた頃から家庭教師から教わったため、僅か9歳でありながらその腕前は一流といっても遜色ない程である。

多少着崩れたパジャマを整えて、ベッドから足を下ろしてスリッパを履く。

ふと、毛布に包まれた子犬が目映った。

穏やか寝息をたてている姿を見ると、自然と笑みが零れてくる。

ベッドからゆっくり降りて、床に膝をつけて子犬の頭を優しく撫でてから声をかける。

「アルフ、朝だよ」

「うっ~~~~・・・ふえいとあ？」

寝ぼけ眼にアルフと呼ばれた子犬が返事をする。

犬が喋れば普通は驚くところだが、フェイトにとっては当たり前のこと。

アルフはフェイトの 使い魔 である。

2年程前に死病に冒され、狼の群れからも捨てられ瀕死の状態だっ

たアルフを拾い、その命を助けるために契約を行った。
以後、フェイトとは主従関係であり、姉妹の様に育ち、フェイトを
支えている。

では何故子犬の姿なのか？

地球・・・しかも日本で狼を飼っている人間などいないだろう。

しかも、かなり大型である。

現在住んでいるマンションはペットを飼う事を許可されているが、
流石に狼はどうだろうか。

人の姿になることも出来るが、意識を集中しないと獣の耳と尻尾を
隠せない。

おまけに、本来の狼の姿も人の姿も主であるフェイトの 魔力 を
かなり消費し負担をかけてしまう。

それならばと、子犬の姿をとることにした。・・・近隣住民の視線
も気にならないし。

「行こう、アルフ。多分、刹那は起きてるよ」

「あゝ、アイツは早起きだからね」

アルフと一緒に自室を出て、件の人物がいるであろうリビングへ向
かう。

今、一緒に住んでいるのは自分とアルフ。そして、先ほど話題に上
がった刹那の3人。

ここで暮らし始めて一週間。3人で住むには、このマンションの間
取りは広すぎる、といまだに思う。

その広いリビングのソファに、こちらに背を向けて座っているの
は癖のある黒髪の少年。

背もたれに体を預け、新聞を読んでいた。

「刹那、おはよう」

その背中に声をかけると、こちらを振り向いて淡々と答えた。

「ああ。起きたかフェイト、アルフ」

刹那・F・セイエイ。
春先の ジュエルシード事件（あの時は事件になるなんて思わなかったけど）で知り合った年上の男の子。
誰が話しかけても、いつも無表情で淡々と答える。

「フェイト、顔を洗って支度を整えてこい」

少し考えごとをしていたフェイトに、刹那が声をかけてきた。

「うん。わかった」

刹那に促されて洗面所へ向い顔を洗って、少し残っている眠気を飛ばす。

自室でパジャマを脱いで、クローゼットの中にある白い制服を手にとる。

冷たい空気が肌に触れて、少し身震いをしてしまうが、我慢。

制服を着て、ピンクのリボンを手に鏡の前に立つ。

いつもの髪型に整えながら、刹那と出会った時のことを思い出す。

初めて刹那と会ったのは、母親のために ジュエルシード を探している時だった。

ジュエルシード の反応があった付近へ飛んで行くと、黒髪の自分より年上であろう少年がいた。

彼の右手には ジュエルシード 。

現地の人かと思いい、離れた場所に降りてに近づいた。

地球では 魔法 を使う人はいない。

空を飛んでいる姿を見せて、余計な警戒心や疑いを持たれないようにするためだ。

彼は ジュエルシード を見つめたまま微動だにしなかった。

ジュエルシード が発動するのではないかと思ったけど、その気配は一向になかった。

暫く様子を見てから、意を決して彼に話しかけた。

「あの・・・」

「誰だ」

私の声に反応して、こちらを振り向いた。

癖のある黒髪に褐色の肌。

なによりも、力強い光を宿した瞳が印象的だった。

「あなたが持つているそれを・・・渡してくれませんか」

「これは、お前の物か？」

彼はジュエルシードを私に見せながら聞いてくる。

「はい」と言えば渡してくれたかもしれない。でも、言えなかった。

「・・・」

思わず首を横に振ってしまった。

「では、何故これを欲しがる」

「それは・・・」

「言えないのか？」

「母さんの・・・ためです。母さんが必要としているから」

「母さん・・・母親のために？」

「・・・」

無言で頷く私に彼は質問を続ける。

「これは一体なんだ？」

「・・・」

答えられない。

「お前の母親は、何故これが必要としている？」

「分かりません。でも、必要なんです」

「理由も聞かされず、お前はこれを探していたのか？」

「理由なんて、私には必要ありません。ジュエルシードを持ってい

けば、母さんはまた笑ってくれる。母さんが笑ってくれるなら、私

はなんだってする。ジュエルシードを全部集めて、母さんにまた笑

ってほしいから！」

少し気持が昂ぶってしまったみたいで、最後の方は声が大きくなっ

てしまった。

「……………」

彼は何か考え事をしているのか、暫く黙っていたが「いいだろう」と言った。

ジュエルシールドが手に入ると思った。でも……

「だが、コレはやれない」

「えっ!?!……………でもさつき……………」

「いい」と言ったのに「くれない」と言ったのだ、少し頭が混乱してしまった。

「コレはやれない。だが、お前は「全部集めて」と言った。ジュエルシールドと言ったな、全部でいくつあるんだ?」

冷静ではなかったとはいえ、余計なことを言ってしまった。

でも、今さら誤魔化しようもないから素直に答えた。

「……………21個です」

「ここに一つ。あと20個必要ということか」

「???」

彼が何を言いたいのか、全く分からなかった。

混乱している私に彼は言った。

「コイツを集める手伝いをしてやる」

「ええっ!?!」

「人数が多い方が手早く済む」

「で、でも……………」

「コイツを集めて、お前の母親に真意を問う。俺が納得できる答えを得られたなら、その時にコレを渡す。それまでは、俺が預かる」

「でも……………」

彼の瞳を見て反論できなくなってしまった。

さつき見たのと同じ、ううんそれ以上に強い光が宿っていた。

でも、魔法が使えない人にジュエルシールドの探索は無理がある。だから……………。

「ジュエルシールドの探索は、危険を伴います。それに……………」

「お前、魔導師……………というものなんだろう?」

「!!!」

驚いた。本当に。

彼が手伝うと言った時よりも。

私はまだ魔法を使ったところを見せていないのに。

「な、なんで……」

「……」

「あなたは一体……」

本当に、何者なんだろう。

「それはあとで話す。俺の名は、刹那・F・セイエイだ」

「刹那、さん」

「呼び捨てでかまわない」

「でも……」

「さん付けで呼ばれることに慣れていない。普通にしてくれ」

「……分かり……うん、分かった。よろしく、刹那。私は、フ

エイト。フェイト・テストロッサ」

「よろしく頼む。フェイト・テストロッサ」

「私の方が年下だから、呼び捨てで」

「わかった、フェイト」

「うん」

あれから、半年以上経つ。

当時、探索の拠点にしていたマンションに刹那を連れて行ったらアルフが凄く怒って、宥めるのに苦労したなあ。

まさか、地球出身でも「並行世界の地球から来た」と言われるなんて予想外もいいところ。

支度が整ったのにも関わらず、思い出に浸ってしまったようだ。

「いけない。二人のところに行かなきゃ」

自室を出てキッチンへ向かう。

キッチンのテーブルには既に朝食が並べられていた。

トーストにベーコンエッグ、サラダの盛り合わせに牛乳。
少食の私にはこれでも十分な量。

いつもどおり、私は刹那の正面に座って、アルフが私の隣に座る。
「いただきます」

挨拶をして食べ始める。

静かだけど、でも3人でとる食事は幸せだと思う。

朝食を終えて、歯を磨くために一旦洗面所へ向かう。

リビングへ戻ると、刹那はコーヒーを飲んでいた。

何をするのでも無く、刹那から少し離れた場所にただ黙って座る。

少しのんびりとした空気に包まれていると、刹那が口を開いた。

「フエイト、そろそろ時間ではないか？」

「うん」

いつの間にか学校へ行く時間だった。

「準備はできているのか？」

「大丈夫。昨日のうちに済ませてあるから」

「そうか」

刹那が気にかけてくれたことが嬉しかった。

鞆とコートを取りに自室へ。

学校指定の薄い茶色のコートを羽織って、鞆を手にし玄関へ向かう。

「刹那、アルフ。行ってきます」

「いつてらっしゃい。フエイト」

「気をつけてな」

笑顔で答えてくれるアルフとは対照的に刹那は無表情だった。

それでも、やっぱり気にかけてくれている。

そんなことを考えながら、待ち合わせの場所へ小走りで行かう。

待ち合わせの場所は、とある民家の前。

「あ、フエイトちゃん！おはよー！」

「おはよう、なのは」

元気に挨拶をしてくれたのは、クラスメイトで大切な友達の一人。
高町なのは。

「寒くなってきたね」

「そうだね」

そんなことを話しながら一緒に通学路を歩く。

高町なのは。

刹那と出会って暫くして森の中で出会った。

白い服を着た女の子。

なのはも ジュエルシード を集めていた。

なのはは「どうして集めているのか」「お話がしたい」「名前を聞かせて」と会うたびに言っていた。

母さんのために。と頑なにしていた心が何度も揺さぶられた。

何度も戦って・・・最後は負けた。

事件が終わってもう一度会った時、なのはは本当に嬉しそうにしていた。

なのはが言った言葉「友達になりたいんだ」

その言葉に答えるために会いにきた。

でも、今まで友達なんていなかった。

だから、どうしたら友達になれるのか分からなかった。

そんな私になのは言った

「名前を呼んで、最初はそれだけでいいの」

「な・・・のは」

「うん」

「なのは・・・」

「うん！」

なのはの名前を呼んだのはこの時が初めてだった。

通学路を歩いていると後ろから声をかけられた。

「おはよう。なのは、フェイト」

「なのはちゃん、フェイトちゃん。おはよー」

振り向くと、やや茶色がかった金髪の少女と長い黒髪の少女が立っていた。

「アリサちゃん、すずかちゃん。おはよー！」

「おはよう。アリサ、すずか」

アリサとすずかだった。

なのはの友達で、今ではフェイトの友達でもある。

なのはとのビデオメールのやり取りで知り合って、先週こちらに来た時に初めて会う事ができた。

とても緊張したが、ビデオメールのおかげで直ぐに仲良くなる事ができた。

TV番組やゲーム、学校の事。取り留めのない話をしているうちに学校に着いていた。

4人揃って学校へ登校する。もう、ごく当たり前なことになっていた。

朝のHRホームルームが終わって授業が始まる。

今日は土曜日なので3時限目・・・午前で終わるのだが・・・。

1時限目・・・社会。

2時限目・・・数学。

3時限目・・・国語。

フェイトにとっては、結構辛い時間割である。

海外から来た、ということになっているが異世界出身のフェイトにとっては、地球の歴史を一から覚えなければならぬ。国語の漢字も然り。

帰りのHRが終わって、下校の準備をしながらなのはと話をしていたら、アリサが話かけてきた。

「ねえ、すずかと話したんだけど。このあと翠屋みどりやに行かない？」

「え？」

「別にいいよ」

「フェイトちゃんも一緒に行こう？」

「あ、うん。」

ちよつと、返答に困ったのは翠屋では刹那がアルバイトとして働いていることを知っているからだ。

困ったりしないだろうか……。

「決まりね。さ、早く行きましょ！」

フェイトの不安を余所に、鞆を持って教室を出ていくアリサを慌てて追いかける。

翠屋は駅前商店街にある喫茶店。

なのはの両親が経営していて、忙しい時期はなのはも時々手伝っているそうだ。

4人で来るのは2回目。その前は、こちらに来た直後の時だ。

「お父さん、お母さん。ただいま！」

「こ、こんにちは。お邪魔します」

「「お邪魔します」」

「おかえり、なのは。フェイトちゃん達もいらっしやい」

なのはのお母さん。桃子さんが笑顔で出迎えてくれた。

店内を見渡すと、白いシャツの上に黒いエプロンを身につけた刹那がいた。

「えへへ。あ、こんにちは。刹那君」

「こんにちは、刹那さん」

「お仕事、お疲れさまです」

「お疲れさま……刹那」

なのは達が刹那に声をかける。

「ああ」

相変わらず淡々とした刹那に、アリサとすずかは苦笑いをしていた。刹那の態度に慣れているのか、なのはは「にやはは」と笑っていた。

そんな様子を見てみると、桃子さんが話かけてきた。

「なのは、奥にお昼の用意をしてあるから。食べていきなさい。フ
イトちゃん達もどうぞ」

「うん、わかった」

「え、いいんですか？」

「もちろん！」

「それなら、お言葉に甘えます。あつ、アルフに連絡しなきゃ
制服のポケットから携帯電話を取り出す。

保護責任者のリンディ提督が買ってくれたものだ。

バルディッシュ を連想させる黒色。

携帯を操作してアルフにお昼は食べて帰ることを伝える。

アリサとすずかも家に電話をしているようだ。

携帯をポケットしまつて、なのは達のところへ行くと、エプロンを
外した刹那が近づいてきた。

「刹那も一緒に食べるの？」

「ああ。食事を済ませてくるように言われた。すまないが、同席さ
せてもらう」

「刹那君と一緒にのお食事は、久しぶりだね」

ニコニコしながら、刹那の方を振り返って話しかけている。

「そうだな」と短く答える。

「私たちは初めてね。ね、すずか」

「うん」

奥の間は畳になっていて、丸いテーブルを5人で囲んで昼食をとる。
時計回りに刹那、なのは、すずか、アリサ、私の順で座った。

なのはとアリサが良く喋って、すずかも時折会話に交じっていた。

刹那はごく稀に相槌をつけていたけど、アリサはいささか不満そう
だった。

昼食を終えて刹那は仕事に戻り、私達はなのは家で遊ぶことになり翠屋をあとにした。

なのは家で遊ぶ・・・と言ってもトランプをしたり、おしゃべりをしたりくらい。

ただ・・・。

「そういえば。なのはもだけど、フェイトはいつ刹那さんと知り合ったの？」

唐突にアリサが聞いてきた。

「え？」

「今、一緒に住んでるんでしょ？兄妹じゃないし」

「あ、私も聞きたい」

「すぐかも興味津津だ。」

「え〜と・・・初めて会ったのは今年の春頃」

「え！？まだ、1年経ってないの？」

「う、うん」

「なのはは？」

「私も同じ頃だよ。初めて会った時、フェイトちゃんと一緒にいたんだ」

「それなら、フェイトを紹介してくれた時にどうして教えてくれなかったのよ。初めて会った時、なのはもフェイトも親しそうに話してるんだもん。びっくりしたわよ」

「ビデオメールには一度も映っていなかったよね」

「おまけに、なのはは『刹那君』。フェイトは呼び捨てだし」

実は、刹那はビデオメールに映っていないわけではない。

なのはのみが観るビデオメールには映っているのだ。

ビデオメールは二種類あり、なのはのみが観るものとなのはとその友達が観るもの。

すずかの言うビデオメールは後者のことであり、そちらには映っていないからだ。

「まあいいわ。次の質問ね」

「まだ聞くの？」

「当たり前でしょ！で、どんな出会いだったの？まずは、フェイトから」

人差し指で、ビシツと指しながら聞いてくる。

「そ、それは・・・」

い、言えない。ジュエルシードを探している時に・・・なんて。

「・・・え」と

う、どうしよう。

「なのはは？」

「ふえ！？わ、私？」

「そ」

「え」と・・・え」と

「・・・はあ、わかったわ」

あれ？アリサがなんか一人で納得してる？

「わかったって、なにが？」

「二人とも刹那さんとの出会いは、心の中に大切にしまっておきた
いってことね」

「「っ!？」」

アリサ~~~~!!??

「ちよっ・・・アリサ。何言ってるの!??」

「そ、そうだよ!」

「はいはい」

「いいな。二人とも」

すずかまで!??

「あ、私達そろそろ塾に行く時間だわ」

「本当だ」

「じゃあね。なのは、フェイト」

「ばいばい。またね」

「ま、待ってなの。アリサちゃん、すずかちゃん」

「アリサ、すずか。私達は・・・帰っちゃった」
「あう」

・・・何とも言えない、気恥ずかしい空気になってしまった。

アリサとすずかが帰ったあと、なのはと少しおしゃべりしてアルフが待つマンションへ帰る。

「ただいま」

「おかえり、フェイト」

「ごめんね、お昼一緒に食べられなくて」

「別にいいよ。リンディ提督達と一緒に食べたし」

「そっか」

そんな事を話ながら自室へ行つて、鞆をおいてコートと制服を脱ぐ。薄い黄色のインナーの上に黒の長袖、白のスカート。

着替えを済ませ、学校の宿題を始める。

漢字や歴史が苦手（というより知らなかった、が正確だが）のため、他の生徒より量が多い。

宿題を終えて、リビングのソファでアルフと一緒にのんびりしていると、玄関のドアが開く音がした。

「戻った」

刹那がアルバイトから帰ってきたのだ。

「おかえり、刹那」

「おかえり」

マフラーを外し、適当にソファへ置く。

「行くぞ」

「うん」

「はいよ」

行先は1階上に住んでいる。リンディ提督達のところ。

ベルを鳴らすと

『はいはい』

と、エイミイの声がインターフォンから聞こえてきた。

「こんばんわ。エイミイ」

「三人ともいらしゃい。待ってたよ」

「やつ！」

「失礼する」

「どうぞ、どうぞ」

いつもどおり、エイミイに招き入れられた。

リビングへ向かうとリンディ提督とクロノがソファアに座って待っていた。

「こんばんわ。フェイトさん」

「こんばんわ。リンディて・・・リンディさん」

リンディ提督は、言い直したフェイトにクスリと笑った。

リンディ・ハラオウン。

フェイトの保護責任者。とっても優しい人。

身寄りのない私を「養子として迎え入れたい」と言ってくれた。

とても嬉しいけれど・・・母さんのことで、まだ自分の心の整理がつかない。

私は、母さんの娘だから。

でも、答えを出すのにそんなに時間はかけない。

もう少し、待っていてください。

「いらつしゃい。フェイト、アルフ、刹那」

「お、クロノ」

「ああ」

クロノがソファアから立ち上がって刹那達に声をかける。

「今日は、お鍋だよ！」

エイミイがキッチンのテーブルに少し大きな土鍋を置きながら、皆

に声をかける。

鍋には、肉や豆腐、野菜など色々入っている。

「日本の冬といえば、お鍋なんだって〜」

エイミイの呼びかけに、皆テーブルに集まる。

温かいお鍋を皆で食べるのは、楽しくて心も温まる。

食事を終えて、今起きていおる事件の話になる。

ここからはお仕事。

最近地球を中心に魔導師が襲われる事件が多発している件で、ロス古代

トログキア遺失物 闇の書 について。

つい先日なのはが襲われた。

赤い服の勝気な少女。

アルフ同様の獣の耳と尻尾を持った男。

そして、『シグナム』と名乗った女性剣士。

・・・強かった。

鋭い剣戟にスピード。

自分もスピードにはそこそこ自信があるけど、シグナムのスピードもかなり早い。

なにより、剣から葉莢みたいな物が出た直後は、威力が格段に上がった。

カートリッジシステム

弾丸に魔力を込めておき、それを使用することで一時的に自身の魔力を引き上げるものだど、クロノが説明してくれた。

結界に閉じ込められて、追いつめられていく私達のために、なのはは無理をして結界破壊の砲撃を撃とうとした瞬間、リンカーコアから魔力を蒐集されてしまった。

直ぐになのはのもとに行こうとしたけど、シグナムに阻まれて助けに行くことが出来なかった。

闇の書 は魔力を蒐集して、魔力の資質によってページが埋まっていく。

666ページ埋まると、闇の書は完成するらしい。
何のために蒐集しているかは、不明。

闇の書の魔力蒐集は一人につき一度きり。
またなのはが襲われる可能性は低いけど、なのはの護衛は継続。
バルデイツシュが修復中だから、無理はできないけど、今度は
なのはを絶対に護るよ。

午後9時を回ったことで、今日はお開き。

「・・・」

「ただいま」

私は『ここ』帰ってくると、必ず言うことにしている。

『ここ』が私の帰る場所だから。

でも、刹那は一度も言ったことがない。

まるで『ここ』が帰る場所じゃないみたい。

確かに、刹那はいずれ元の世界へ帰るのかもしれない。
それでも、今の刹那の帰る場所は『ここ』だから。
だから・・・

「ただいま」

いつかは、言ってほしい。

母さんに笑ってほしいから。

そのために、言われるままに動いていた私。

あの時と同じ気持ち。

刹那に笑ってほしい。

でも、あの時と違う。

ゆっくりと刹那を変えてみせるよ。

私が・・・ううん、私達が。

フェイト・テストロッサの一日。
全て断ち切る光は、未来を照らす。

「待っている。お前の不安、俺が取り除いてやる」

そう言うなり、踵を返してブリッジを出て行こうとする刹那。

「パパ？」

「刹那君！？」

「刹那！」

声をかけるが、刹那の歩みが止まることはなかった。

「ダブルオーライザー、刹那・F・セイエイ。ゆりかごを破壊する！！」

バリアジャケットを身に纏った刹那が アースラ から飛び出てゆりかごへ向かって行く。

私達はそれをただ見ていることしか出来なかった。

フェイト・テスタロッサ（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

前話をお読みいただいている前提で書いていますので、前話より説明文は少なくなっていると思います。

（なのに、文字数が増えた!?!）

また、本人視点のより意識して書いたつもりです。

（上手く書けてませんが）

最後に、こんな駄文「お気に入り登録」してくださった方。

本当にありがとうございますm（| |）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3653ba/>

魔法少女リリカルなのはA'sOO～IF～（仮）

2012年1月14日01時49分発行